



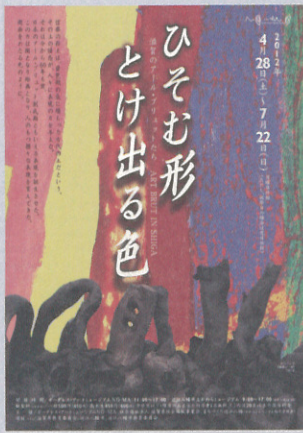
2012.6 / VOL.13

ボードレス・アートミュージアム
NO-MA ニュースレター

Topic of NO-MA ひそむ形 とけ出る色
滋賀のアル・スリュットたち ART BRUT IN SHIGA

展覧会レポート 日韓合同企画展
Art Brut in Japan and Korea 日/韓 行き交うところ

ABCColumn アール・スリュットを巡るコラム VOL.3
地域インタビュー あのひとの近江八幡スタイル 初雪食堂



ひそむ形 とけ出る色

滋賀のアール・ブリュットたち
ART BRUT IN SHIGA

2012年
4月28日～7月22日

- ① 一般500(450)円・高大生450(400)円
中学生以下、障害のある方と付添者1名無料
※料金は2館共通。()内は20名以上の団体料金。
- ② ボーダレス・アートミュージアムNO-MA 11:00～17:00
近江八幡市立かわらミュージアム 9:00～17:00
- ③ 月曜(ただし、祝祭日の場合は翌日) (入場16:30まで)

【主催】ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、
社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団、
まちづくり近江八幡(かわらミュージアム指定管理者)

【後援】滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会

【特別協力】NPO法人はれたりくもったり

【協力】伊香立の杜 木輝、オープンスペースれがーと、唐崎やよい作業所、
蒲生野会ケアホーム、湖北まこも、サニーサイド、滋賀県立近江学園、
滋賀県立八日市養護学校、障害者支援施設もみじ、障害者支援施設あざみ、
信楽青年寮、社会就労センターこだま すたじお木壺、障害者支援施設かいぜ寮、
ステップアップ21、ステップ広場カル、彦根学園、びわこ学園医療福祉センター野洲、
やまなみ工房、近江八幡観光物産協会、NPO法人しみんふくし滋賀、八幡酒蔵工房、
近江八幡市立図書館、酒游館



会場:NO-MA



会場:かわらミュージアム



文:はたよしこ
(企画展アートディレクター)
写真:大西暢夫

県内のアール・ブリュット作家 50名の作品を展示

「ひそむ形 とけ出る色 滋賀のアール・ブリュットたち」展が開幕

今年度のスタートをきる展覧会は「滋賀全圏域のアール・ブリュット」作品を存分に観ていただく企画展だ。戦後すぐから始まった滋賀におけるこのパイオニア的な表現活動の全容を観せる展覧会にしたい。2月早々、私と横井学芸員は現場を回り始め、丹念に作品を観ることから始めた。作品現場の状況は新旧様々だが、10年前にも多くの現場を回った私は、今や福祉現場には若いアート系出身者が多くなっていることに驚いた。こうして20か所以上の施設や病院、個人宅を廻り、約300名の作品を拝見した。その結果50名の作者を選ばせていただいたのだ。陶芸23名、平面27名。展示は、NO-MAに平面作品、第2会場のかわらミュージアムに陶芸作品を。これは初めからイメージしていたので迷いは無かったが、気がかり

だったのは、かわらミュージアムの床の凹凸と、ライティングのアクセント効果が出しにくい点だったが、予算がまったく合わない。ここからは他のスタッフも交えて、あらゆる手段で予算内に収まる策を求めて奔走してもらい、イメージ通りの展示を実現することができた。アール・ブリュットの作品たちは、展示の方法で生きも死にもする。なぜなら、展示して見せることなど全く眼中に無い作者たちの表現であるからだ。それだけに、デリケートで且つ大胆な感覚が展示には必要なのだ、改めて感じた。レセプションは、ヨーロッパ巡回展*出展者も交え100名を超える関係者と、嘉田知事はじめ来賓の方々で溢れかえらばかり。盛大に幕を開けた。

*ヨーロッパ巡回展の詳細は最終ページで。



レセプション参加者(46名の作家のみなさんとともに)

Report レポート

開催記念祝賀レセプション

「ひそむ形 とけ出る色 滋賀のアール・ブリュットたち」展
+ヨーロッパ巡回展「Art Brut from Japan」



2012年4月28日(土)13:00～15:00
グリーンホテルYes近江八幡2階 白雲の間

多くのご来賓にお集まりいただいた本展レセプションでは、とりわけ滋賀県知事・各市長・県議会議員から、温かな祝辞を数多くいただいた。嘉田由紀子知事は日本のアール・ブリュットが欧州から高い評価を受けていることを滋賀県の芸術と福祉の転換点と捉えつつ、「いま、この滋賀から福祉と芸術が繋がる。このことを皆さんと共にしっかり支えていきたい」と力強く語られた。富士谷英正近江八幡市長は、かわらミュージアムとNO-MAが地域連携を実現させたことについて「近江八幡から滋賀県、全国、そして全世界に発信する芸術。これはいわばこの市の財産だ」と謝意を表された。続いて、西澤久夫東近江市長から、支え手の力により多くの人が触れられる芸術が生まれていることに対する驚き、今江政彦議員(近江八幡市)、有村國俊議員(近江八幡市)からは、アール・ブリュットのさらなる発信に対する希望、同じく、高木健三議員(近江八幡市)、井阪尚司議員(蒲生郡)からお祝いの言葉をいただいた。また、岩佐弘明議員(守山市)から、生きた芸術を多くの方に親しんでもらえる素晴らしさ、梅村正議員(大津市)からは「作家やその家族の今日までのプロセスに感動を覚えた」と賛辞を受け、佐藤健司議員(大津市)から、アール・ブリュットの裾野拡充について激励をいただき、本展タイトルにもある、滋賀のアール・ブリュット作家たち、1人ひとりが歩んで来た歴史を実感し、未来へとつなげる交流の場となった。



④NO-MAでの展示風景
⑤「ワールド・マッコリ・カフェ」のようす(酒游館)

展覧会 レポート

Exhibition Report

文:横井悠
(日韓合同企画展 担当学芸員)

日韓合同企画展

Art Brut in
Japan and
Korea 日韓
行き交うところ

2012年1月21日～3月11日

韓国でアール・ブリュットの振興に取り組んでいる誠信女子大学との共同で実現した企画展。それぞれが、それぞれの国で見出してきたアール・ブリュットに触れることで、アール・ブリュットという概念に対する思考をさらに深めることを目指した。

韓国では2011年9～11月に誠信女子大学博物館のオープニングイベントとして開催され、ソウルの人々に新鮮な衝撃を持って迎えられた。16人の日韓の作り手による413点の作品を紹介した本展は、その作品の一つひとつが、多様な優しさ、強さを私たちに与えてくれた。一方、作者が持つ経験や、作り続けることで生まれる何か、それらが体現する色や形は、日本で展示会場となったNO-MAの特徴ある空間とひとつになっていた。

この展覧会を包括するキーワードを挙げるとすれば、それは「異なる文化との出会い」。期間中に開催された「ワールド・マッコリ・カフェ」は、パフォーミング・スヤトークセッション、食をとおして、互いの文化的要素を見つめ直す試みとして行った。参加者一人ひとりが持つ歴史、生活、芸術に対する捉え方が絡み合い、心交わるひと時となった。

その人に
近づいてゆくこと

高橋伸行さん講演より



アール・ブリュットを巡る
トークシリーズ 視点7

【ゲスト】高橋伸行
アーティスト
やさしい美術プロジェクトディレクター
名古屋造形大学准教授

【聞き手】保坂健二郎
東京国立近代美術館主任研究員

日時：2012年1月28日(土) 14:30~16:00

会場：滋賀県立近江学園

文：アサダワタル
アール・ブリュットを巡るトークシリーズ
ディレクター

病院とアーティスト、デザイナーとの協働で「安らぎのある医療環境」「地域に開かれた病院」を創出すべく活動を続ける「やさしい美術プロジェクト」ディレクター高橋氏。まず、彼を招いた背景として、アール・ブリュットの「作家性」を、特定の個人ではなく、その個人も含めた創作環境そのものに見出すヒントを得たいという、ディレクターである僕自身の思いがあった。

瀬戸内国際芸術祭2010の一環で開催されたプロジェクト「つながりの家」。舞台となった大島は島全体がハンセン病患者の国立療養所。ハンセン病回復者の方々が、後遺症と高齢にともなうケアのため現在も島で生活をしている。そこでかつて独身寮だった15畳の空間を「GALLERY15」と名付け、島の記憶をテーマに様々な展示会を開催。ある時は過去に生活で使われていた家具や食器などが、またある時はハンセン病患者の知恵の記録としての補助具が並べられる。とりわけ興味深かったのが、約25年前に捨てられたコンクリート製の解剖台を海中から引き揚げた展示。「一言では説明できないほど様々なやりとり、島の人の賛否

両論の議論を経て実現した企画です」と話す高橋さん。続けて、島で生活する方がハンセン病を患った大島に移住しなくてはならなかった半生を語る勉強会。その方々とともに大島を巡るツアーを開き、藪の中にある梯子を登って圧巻の海景色スポットに誘われたり。島の中で彼らがどのような過程を経てこの海景色を見てきたのか、できる限りその体験を共有するプログラムを考案・実現していく。また、愛知県の足助病院のリハビリテーション科で利用者と作業療法士等が育ててきたアサガオの種と苗を新潟県の十日町病院に「花嫁」として嫁がせるコミュニケーションプロジェクトや、愛知県の発達センターちよだでの自由な造形ワークショップの取り組みなど、様々な事例について紹介された。

「僕の中では病院で行っているものも、福祉施設でも島でも、やっていることはそこにいる人たちに近いこと、ということ。それは必ずしも「作品」という顔を持たない可能性もある。美術家として活動してきた彼は続けて「作品」というものがそこそのものだけで成立しているというよりは、何か色々な関係性があるって成り立っている気がする」と話す。聞き手の東京国立近代美術館主任研究員の保坂健二郎さんはそれに対し、「美術館で働いている立場として、また美術史の観点としては、多くの人に感動してほしい」と思っているからこそ作品を取捨選択し、作品そのものだけで感動できる基準が必要になる。しかし、良い意味で狭いコミュニティの中で共有される作品のあり方、感動もあるんだと、考えさせられた」と。発達センターちよだに通っている子どもたちが、「この場所で、この時間に、この人たちと一緒に何かを作る」ということ。つまり「関係性」が完成品としての作品の強度よりも強い感動を共有させる、そういった「作品」のあり方。だから「この瞬間」をどう味わい、どう共有し、どう未来への記憶として変換してゆか、そのプロセスそのものに「生々しさ」をとまらう。そういった美術の可能性への模索と挑戦。高橋さんは「土の中の植物を抜いた時に、根っこから土からもう色々一緒にくっついてくるような、そういった美術のあり方もあってほしい」と語った。これまでのトークシリーズでは、アール・ブリュットの「作家」と彼女らが作り出す「作品」というものが存在することを前提に議論されてきたように思える。しかし、「作家」が誰かわからず、かつどこまでが「作品」かかわらない状況の中で、「生」の状態としてその場に湯気をあけて立ち上ってくるような、そんなアール・ブリュットは可能なのか。新たな視点を垣間見た気がした。



おすすめのメンチカツ定食
¥900-

地域インタビュー
omni-hachiman local interview

終戦の年から67年、
ずっと「そこ」にある町の食堂

初雪食堂

2代目の女将さんと、3代目のご主人に

お話をうかがった

文：藤本えりか(学芸員)

NO-MAスタッフ行きつけの食堂がNO-MAから徒歩10分程の場所にある。少し奥まった扉の向こうから良い匂いがしてくる。中に入ると3代目の女将さんの「いらっしやいませ〜」。ほっとする空間。おいしい匂い。うどん、そばをはじめ、定食から丼ものまで、常時40種類以上のメニューが並ぶ。そのどれもが手頃な値段で、ボリューム満点!

「初雪食堂」は、昭和20年(1945)の終戦直後に開いた。実に67年前からずっとこの町にあるわけだが、食堂の前は、同じ場所でアイスクリームや乳酸菌を生産・販売し、製麺業も行ってたそう。

お店のある仲屋町通りは当時のメインストリート。映画館やパチンコ屋もあり、深夜まで人で賑わっていた。そんな通りに面していたこともあり、地元の人たちのために戦後すぐ、その場で食べ

られる「うどんやさん」を始める。それが「初雪食堂」の始まり。そのうちお客さんのリクエストでどんどんメニューが増えていき、今のメニューの豊富さになったそう。印象的な「初雪」という名前の由来は、食堂を始める前にやっていたアイスクリームを作る機械の名前が「初雪」という名前だったから、というのは何より驚きだ。

建物の造りも珍しい。奥にあるトイレまでの道のりは、年季の入った大量の岡持ちや、石畳、釜戸など、まるでタイムスリップをしたかのような光景が広がる。20年ほど前、屋根のふき替えをした際に出てきた瓦を、かわらミュージアムさんに調査してもらったと、江戸時代の終わり頃、文久元年(1861)のものであったことから、建物は150年以上の歳月が経っていることがわかった。

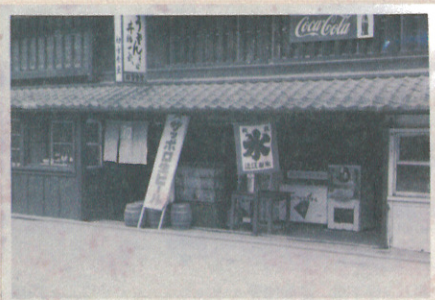
最後にご主人におすすめのメニュー

を聞いた。どれもおすすめだが、その中でもメンチカツ定食(¥900-)とのこと。「できるかぎりお腹いっぱいになっても構わない」と話すご主人の笑顔がとても印象的だった。地元の人やNO-MAスタッフの元気の源、初雪食堂。近江八幡やNO-MAにお立ち寄りの際は、ぜひ皆さんにも食べに行ってもらいたい。



滋賀県近江八幡市仲屋町元7 ☎0748-32-2427
Open 9:00~17:30 水曜定休

あのひとの
近江八幡
スタイル



約50年前の初雪食堂

オランダ展 レポート

バスをおりて、まだ肌寒いオランダ・ハールレムの閑静な住宅街を、出展作家やそのご家族と歩く。皆、それぞれおしゃれに着飾り、取り分け目立つのは着物姿の女性たち。笑顔で列を作って歩くその先に、湖の畔に建つ、煉瓦造りの建物が見えた。それが、今回の舞台となるドルハウス美術館(HET DOLHUY)だった。

①ドルハウス美術館(HET DOLHUY)外観
②美術館内(展示)の様子



2012年4月20日、日本と8時間の時差があるオランダの地で、ヨーロッパ巡回展「Art Brut from Japan」が始まった。今回の展覧会は、2010年にパリ市立アル・サン・ピエール美術館(フランス)で開催された「アル・ブリュット・ジャポネ」展がきっかけとなり、オランダのドルハウス美術館の館長が日本を訪れ、自ら選んだ滋賀県の作家24名を含む46名の作家、約850点の作品を展示するもの。なんと、オランダを皮切りに延べ4年をかけてヨーロッパを巡回する。

ドルハウス美術館は、まず建物が印象的だった。それもそのはず、昔は教会として使われていた歴史的な建造物で、礼拝堂の周りの建物は精神病患者などのための療養所や病院として使われており、そこを美術館に改修したそう。いくつもの部屋に分かれた展示会場には、ヨーロッパにおける歴史的な資料や治療器具を常設展示する部屋もあり、館長の「現代から見ると非人道的な器具だが、ここには我々の深い反省の意味が込められている」という言葉は印象深いものがあった。

他には図書館、会議室、ミュージアムカフェなどもあり、一般の人でもワークショップやレクチャー、パーティーなどで自由に借りられるようになっている。どの部屋も、精神病院としての機能を果たしていた面影はなく、歴史的建造物の風情を残しながらアーティストックにリノベーションされている。

オープニングパーティー会場のカフェには多くの関係者がワイングラスやビールジョッキを片手に集まり、日本の作家たちもその輪に加わった。館長のお話から始まり、パーティーに出席した出展作家の名前が呼ばれ、それぞれに挨拶をしていく。皆、緊張している素振りも見せず、実に堂々としていた。

展示会場は、常設展示会場を挟んで2会場に分かれ、テキスタイルや陶器、絵画他、多様な素材を使った日本の作品は一面グレーの展示会場に所狭くと展示されていた。そのうち、あちこちで出展作家と作品を前に撮影会がスタート。雑誌のようにポーズをとって撮影に応じる作家も。本展覧会の正式な名称はオランダ語で「Verborgen schoonheid

uit Japan」と書く。辞書によるとその意味は、「日本の隠された美」。そんな「日本の隠された美」は、7カ国を巡る過程で、ヨーロッパの人々にどのように受け入れられ、この出来事が派生し、その先にどんなことが起こっていくのだろうか。

文：藤本えりか(学芸員)

ヨーロッパ巡回展 「Art Brut from Japan」

【現在開催中】
◆オランダ(ハールレム)
2012年4月20日～9月2日
ドルハウス美術館(HET DOLHUY)
http://www.hetdolhuys.nl

【開催予定国】
◆イギリス(ロンドン)
2012年10月中旬～ ウェルカム・コレクション
◆ベルギー(アントワープ)
2013年春～ ギスレン博士美術館
◆オーストリア(ウィーン)
◆デンマーク(オーフス)
◆ドイツ(ハイデルブルグ)
◆イタリア(ローマ)

【お問い合わせ】
ヨーロッパ巡回展 日本事務局
(社会福祉法人愛成会)
〒164-0001 東京都中野区中野5-26-18
☎03-3387-0082 / ☎03-3387-0820
✉europe-exhibition@aisei.or.jp

NO-MA 今後の貸館展示

NO-MAの場所や休館日は、下段をご覧ください

暮らしのなかで息づく 竹の道具たち 現代の名工 廣島一夫の手仕事

2012年8月1日(水)～12日(日) ※6日(月)休館

🕒 10:00～17:00 (最終日は15:00まで)

💰 一般300円・高大生250円

中学生以下、障害のある方と付添者1名無料
主催：NPO法人はたたりくもつたり
※会期中、若手職人による実演や、体験ワークショップ有

Jun Arakawa

2012年8月14日(火)～19日(日)

🕒 10:00～17:00 💰 無料 主催：荒川 淳(個人)

「ひそむ形 とけ出る色 滋賀のアル・ブリュットたち」展 関連イベント

2会場を巡るギャラリートーク

2012年6月9日(土) 🕒 13:30～15:30

はたよしこ
(ボーダレス・アートミュージアムNO-MAアートディレクター)

2012年7月7日(土) 🕒 13:30～15:30

横井悠(本展担当学芸員)

集合：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

会場：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

近江八幡市立かわらミュージアム

(NO-MAでのトークの後、かわらミュージアムまで歩いて移動します)

定員：20名(要予約、定員になり次第締め切り)

💰 無料(ただし展覧会観覧料が必要です)

展覧会連動プログラム

『Reprise ルプリーズ』

— 綴られた時の記憶を音楽につなぐ —

出演：中路友恵 (打楽器奏者・糸賀一雄記念賞音楽祭 ナビゲーター)
×國松電次(ギタリスト)

2012年6月30日(土) 🕒 15:00～16:30 ※開場は14:30

会場：酒遊館(滋賀県近江八幡市仲屋町中21)

定員：100名(要予約、定員になり次第締め切り)

💰 無料

企画展出展作家である仲澄子さんのご愛孫お2人によるコンサート。音楽家として国内外で活躍するお2人が、スミおばあちゃんの心の奥深くに巡っている“時の記憶”を旋律と作品で再現します。

※ご予約・お問い合わせはボーダレス・アートミュージアムNO-MA(下記)まで

※NO-MA主催の次回企画展は詳細が決まり次第、ホームページ等でご案内いたします



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA

滋賀県近江八幡市永原町上16

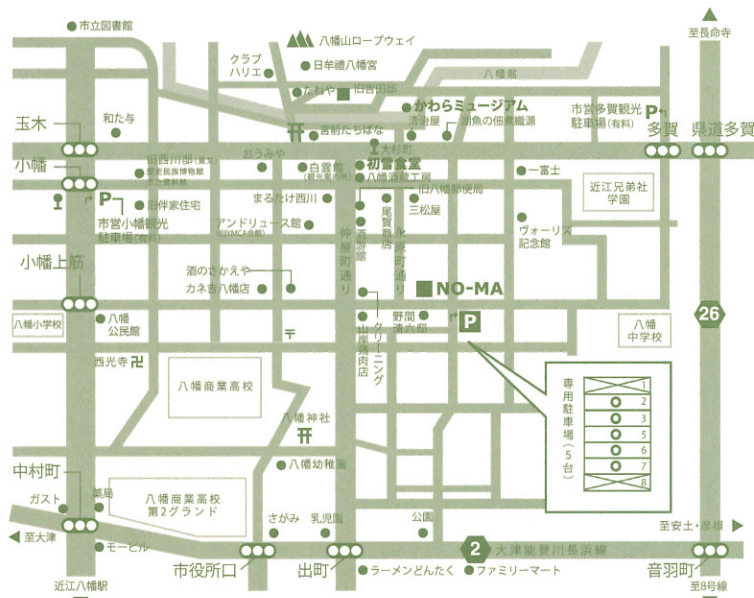
TEL/FAX 0748-36-5018

休館日：月曜日

(月曜日が祝祭日の場合は翌日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp

http://www.no-ma.jp



バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町バス下車 徒歩10分
車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・8号線」方面に出る 国道8号線「西横関」交差点右折「東川町」交差点左折 県道2号線「小船木町」交差点右折 「出町」交差点左折(計30分)

はたよしこ 編集長はつばやく

ここ滋賀県における陶土の造形作品は、戦後の混乱期の最中から始まりました。糸賀一雄を中心とする、今から65年前の人々の高い理念が元になっているのです。「障害のある」「この子には世の光を」あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよがぎを掛けて輝やかさそうというのです。「この子らを世の光に」です。「愛と共感の教育」より「糸賀一雄の思想は、当時としては驚くほど斬新なものでした。一般人の生活も安定しない混乱の中、言わば「表現教育を支柱の一つとして自由な粘土造形をスタートしたのですから驚きです。」

なぜ滋賀にばかり陶土造形の逸材が出るのか。いくつもの公募審査に関わる私も、その点については不思議でした。場所は伏せませんが、日本を代表する前衛陶芸作家の鯉江良二さんと審査をさせていただいたおり、彼が叫んだことがありました。「なんで陶芸部門はこんなにつまらないんだ！この2点を残して全部落とした方がいいのではないか。作る喜びが出ていないなんて悲しいよ」と、地団駄を踏んでおられました。彼は滋賀の施設に通い、多くのすごい陶土作品をよく知っていたのです。